ドローイングワークショップ
五感で描く―求心力の旅
Drawing in sensibility
―a centering journey

金恵貞(キム・ヘジョン)
陶芸家

滞在作家の金恵貞先生による講座が二日間、開催されました。
自然との共鳴を感じるオリジナルワークショップです。

一日目
森のなか、イメージ・ウォーキング

初日はまず、二期倶楽部の森を探検します。チベット・シンバルの音を合図に、自分の好きなように動きます。森を歩くなかで、気持ちが惹きつけられる自分の「宝物」を見つけ、午後の作業の素材として持ち帰ります。

お昼休み後、アネックス(別館)へ移動しました。ヒグラシが鳴き、外は霧、神秘的な空間です。フロアにロール紙が円く置かれ、周りを机が囲みます。伸ばしたロール紙に座りました。「正確に描こうとしない。新しい発見を感じられるよう、自分をゼロに戻す気持ちで」と金先生のインストラクションが入ります。紙の水平線あたりを、焦点を外してぼんやり見て、呼吸を整えます。配られた目隠しをします。野菜が手の中に置かれました。「重みや質感を感じて。森を探検したように、手の中で探求してください」。見えない状態で集中すると、繊細に感じ取れるようです。その後、ドローイングが始まります。

水と粘土、墨汁を画材に、触ったモノを描きます。描くところが無くなったら、ロール紙を前に送りながら、手の平、指、甲で線を生み出していきます。

「道具や画材は、手の延長」と、スポンジを付けた竹、竹をカットしたもの、クレパスなども使用します。机に紙を移動し、森で見つけた「宝物」が登場。「宝物を通して、森をイメージしてください。そのときの匂い、川の音、自分の足。何を発見したのか、周りの世界をイメージして私の森を描きましょう」。金先生の言葉通り、それぞれの森が広がっていきます。

次のセッションはモデルが登場して、人体のドローイングに取りくみます。まずはゆったり踊り、静止ポーズへ。「描けない」と思う意識から解き放たれながら、踊りを見て、静止すると、描く。また、描く。次々とロール紙を送り出しました。

その後は「ストップ&ゴー」です。描きたいと思ったときに、誰でも踊るモデルにストップをかけることができます。「足や身体の動きも使って出る線はまったく違うので、椅子を置きませんでした」と、立っている理由も説明されました。「踊りは、何かを見つけたときにストップしてください。森を歩いて何かを見つけたときと同じ感覚です」また、「両手を一度に使ってアタマが働かない状態にしましょう。字を書くカラダとアタマの使い方に、仕組みが戻ってしまわないように」と注意が入ります。踊りに加わることを勧められ、みんなの動きで空間を創りあげます。机の前にロール紙が重なります。「自分の深いところからの動きが伝わって、紙にマークされる」。ドローイングの原点を実感しながら、一日目が終了しました。

鳥の声が美しく響く、二期倶楽部の森、思い思いに自分だけの「宝物」を探します。固形物以外は「留まっているイメージを、想像の袋に入れて持ち帰ります」。

両手を用いて、手の中で丁寧に探求した野菜を、感じるままに描きます。赤土と水で、ガサガサ、ツルツル、スベスベ、と様々な質感が生み出されました。

二日目
五感を解放、自在にドローイング

二日目も外からスタートします。二期倶楽部本館の水辺で素足になり、石の上に座ります。「目を閉じて、呼吸を整えるように、静かに水の音、風の音、石の感じに感覚を澄まして。足の裏をやさしく触ります」。次は石の上を、ゆっくりと「足の裏のいろいろな箇所を思い出しながら、視界を広く、意識は自分の内側に」向けるように歩きます。

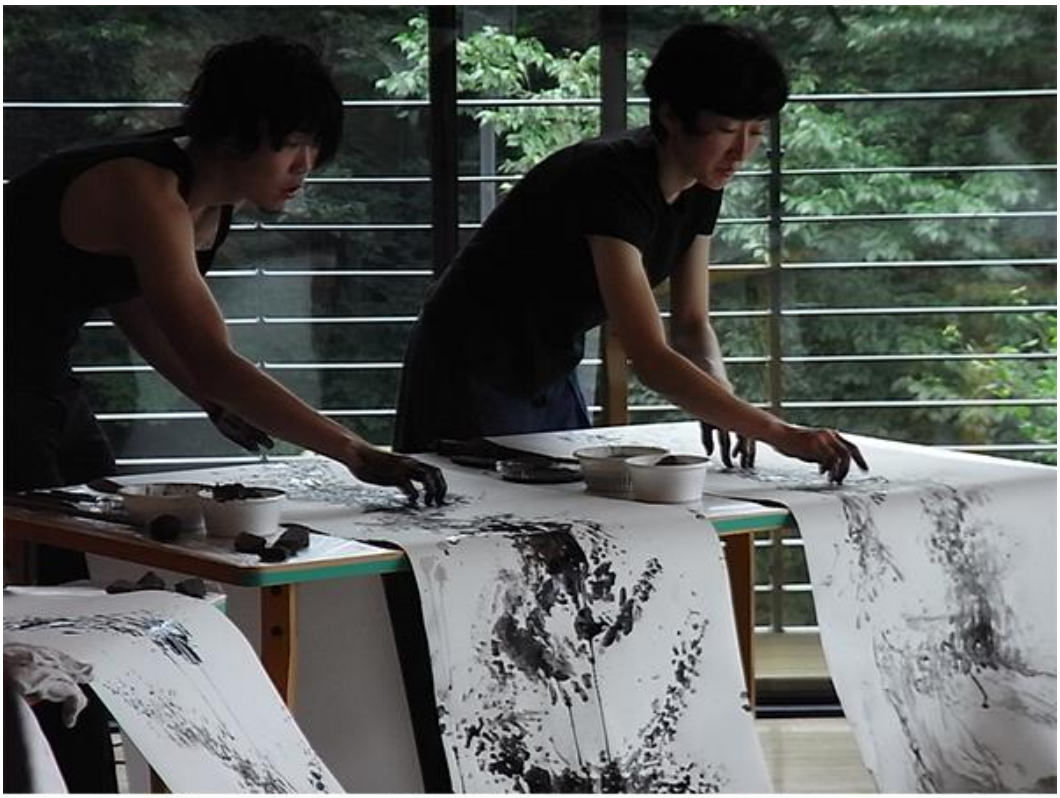
お昼休み後はアネックスへ移動。フロアで車座になり、自分の足に触りました。「何かを食べると、味を舌が覚えています。同じように、手は触った感覚、鼻は匂い、足の裏は今日まで歩いた場所を覚えています。意識が忘れていることも、覚えている。声を聴くつもりで触ってみましょう」。その後、何を感じ思い出したのか、感想を交わし合いました。

男女二人が、背中合わせに立ちます。「西洋では言葉に女性形と男性形があり、太陽は男性で月は女性。プラスとマイナス、陰と陽という分類もあります」。金先生は男性性と女性性に触れて「私たちのなかには、男性性も女性性もつねにあります。人前で出せないような抑制のある異性性の部分。あるいは固いものや柔らかいもの、太いものや細いもの、強いものや脆いものなどの性質。それらを探しながら、画材の使い方、可能性も探っていきます」と説明されます。スポンジ、粘土、水を使って、ドローイングの開始です。手の平、甲、節を試しながら、量感を大切にして個々の性質を発見していきます。ポーズを変えて、スポンジとクレパスも使いながら続けられました。

モデルに自由にストップしてもらい、描きました。形にとらわれないで、動きや身体にある性質、エネルギーを見つけます。つぎに「ストップ&ゴー」です。踊りたい人はフロアで一緒に動きます。動いているモデルを描くときには、印象を瞬時に捉えることが重要なようです。「絵を描くことはダンス。踊りが判らないと思わないで、紙に描くことを身体のなかで探せば、踊りになります」。フロアじゅうに動きが溢れ、二日目も終了しました。
参加者の皆さんから、感動の声をたくさんいただきました。それぞれの「何か」をつかむことができた、素晴らしい経験だったようです。

ダンサーの踊りに惹き込まれます。自分の手以外に、身体全体リズムに乗って、自由に紙に表現します。さまざまな画材で、その踊りのクライマックスを描き出します。

座禅を組んで並び、不思議な雰囲気。石の上を歩くプログラムでは、まるで聖地に巡礼するよう。通りすがりの人々の言葉を鎮め、心を穏やかにさせました。



紙を叩く音が響き、様々な種類の「点」が生まれました。シャープな線や柔らかい線、強弱をつけて、木炭や竹ペン、クレパスや手などで「線」で描くことも行いました。

ロール紙を伸ばして、絵を見渡します。同じものが無い、自分だけの宝物となった様子。お気に入りを選んで切り取り、部屋に飾るのも良いとアドバイスがありました。